

コロナ禍に対応した ホームカミングデー

卒業生は大学にとって心強い後援基盤であり、寄付を含めた学生支援や社会貢献活動の仲介など、大学の持続的な発展のためには欠かすことができない存在である。18歳人口の減少や大学全入時代の到来など、高等教育を取り巻く環境が厳しさを増す今、卒業生との関係強化や、若年層の卒業生との関係構築に力を入れる大学も増えている。

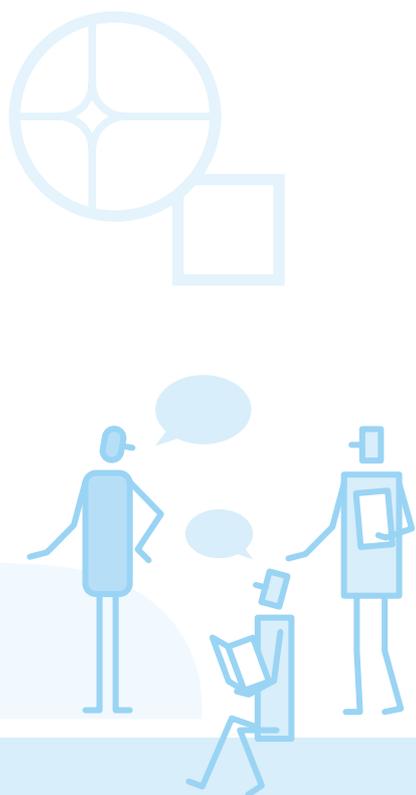
卒業生の帰属意識を醸成し、大学との関係を強化する機会のひとつとして、各大学はホームカミングデーを開催してきた。著名な卒業生による講演会などのエンターテインメント性の高い企画、キャンパスツアーや展示会といった大学の歴史を振り返りつつ今を紹介する企画をはじめ



とするオリジナリティ溢れるイベントを実施し、卒業生の「同窓会」を盛り上げている。

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、従来のホームカミングデーの開催方法やコンテンツは大きく見直されることとなった。それに伴い、多世代にわたる卒業生と大学の関係構築の方法も、少しずつ変化している。そのあり方は各大学さまざまであるが、運営方法や活性化に悩む大学がある一方、コロナ禍の経験を駆使してより多様な展開を見せる大学もある。

ホームカミングデーの活性化に向け、大学は何をすべきか。各大学の多岐にわたる取り組みを通じてその開催目的を再定義し、卒業生との関係強化策やコロナ禍で難しくなりつつある運営ノウハウの継承など、多角的な視点からホームカミングデー活性化に向けたヒントを提供する機会としたい。



CONTENTS

ホームカミングデーオンライン開催

―母校とつながる駒澤のこころ―

日幡 亮一 駒澤大学教育振興部

多様な交流ができる同窓会組織であるために。

「楽しい」演出とエネルギーの創出を。

―TACHIBANA THANKS DAYに込めた想い―

蘆田 一毅 京都橘大学総務部総務課長

石原 雅子 京都橘大学企画部広報課長

卒業生との関係強化の

起爆剤としての事例紹介

上坂 孝博 学校法人桜美林学園

事業開発部長

ホームカミングがもたらす豊かな時間とは

―母校はなにゆえ「マザー」であるのか―

中里 則之 立教大学総長室次長兼

渉外課長

ホームカミングデー

オンライン開催

―母校とつながる駒澤のこころ―

日幡 亮二

駒澤大学教育振興部

はじめに

駒澤大学のホームカミングデーは大学と同窓会との共催により実施されている。これは「ホームカミング」の名のとおり年に1度、母校である駒沢キャンパスを会場として同窓生を迎え、著名同窓生による講演会や名物教授による懐かししの授業などを実施するもの。開催年によっては学生主体のオートムフェスティバル(いわゆる大学祭)と同日開催し、学生時代の青春よろしく現役学生サークルの発表会や模擬店などを楽しんでいた。卒業後5年、10年、20年、30年、40年以上の同窓生をメインゲストとして招待し、例年

800名を超える方々の来場があった。近年は時代の流れとともに若手同窓生の参加誘引をテーマとし、お子さま連れ、ファミリーでも楽しめる企画の考案、例えば「フワフワバルーン」の設置やワークショップの実施など工夫を凝らして開催内容を検討してきた。こうして2004年の第1回から2019年の第16回まで回を重ねてきた。

1 新型コロナウイルス感染症の猛威

「第17回ホームカミングデー」を開催していたであろう2020年度、新型コロナウイルス感染症の感染拡大を受けて大学は混乱していた。学生はキャンパスに入構できなくなり、授業はかつて経験したことのない「オンライン」化。

5月、例年であれば当該年度のホームカミングデー実施に向けた委員会を開催する時期だったが、外出もままならない当時に対面での会議などはもつての外と、委員会開催がかなわず、「第17回ホームカミングデー」は中止を余儀なくされた。中止の決定に対して残念がる同窓生の声もほんの一部で、それ以上に未知のウイルスの脅威が上回り、開催中止やむなしと受け入れられた。

2 ホームカミングデーの新たなかたち

本学では中止となったホームカミングデーだったが、この間も他大学においては新しいかたちでのホームカミングデー開催がなされていた。その主たるものがオンライン開催であった。あらかじめ録画・収録・編集した動画を配信したり、リアルタイムで講演会などのLIVE配信を行ったり、Web会議システムを使用して交流会を実施したりと内容はさまざまだが、ホームカミングデー自体の開催を途絶えさせずに、同窓生にとっての「母校とつながる」行事を継続させる姿勢は素晴らしく感じた。それと同時に、トンネルの先が全く見えなかったコロナ禍情勢を鑑みるに、本学でもこの手法を取り入れることになるであろうことは考えるに易かった。

3 迎えた2021年度

新型コロナウイルス感染症の情勢は変わらず、本学も一部の小規模授業では対面とオンラインを併用したハイブリッド授業が展開されるようになったが、キャンパス内の閑散とし

た様子は続いていた。2021年5月、また当該年度のホームカミングデー実施に関して考え始める時期が到来した。冒頭、ホームカミングデーは大学と同窓会の共催であると述べたが、実質は大学側では総務部広報課、同窓会側では教育振興部という部署が事務局を担う。双方で検討を重ねた結果、まず2年続けて「何もしない」という選択肢はないという統一見解がもたらされ、そして前年の他大学の取り組みを鑑み、オンラインイベントの専門業者によるプレゼンの機会を設け、本学もオンライン開催にかじを切り始めた。

4 オンラインコンテンツの創出

オンライン開催の決定に基づき、続いては本学がどのようなコンテンツを提供・発信できるのか、企画案の創出が始まる。真っ先に考えたのは、「通常開催のときに実施していたプログラム」の再現である。「開会式&オープニングアトラクション」「著名同窓生の講演会」「懐かしの授業」など。これらは撮影・収録を行い配信ができるため、オンデマンドコンテンツにはなるが企画としては着手しやすいものだった。ただし「開幕」の一体感を持たせるため、「開会式」

をはじめ各コンテンツの配信開始時刻は定刻に設定することとした。実際に企画したコンテンツは次のとおりである。

- ①開会式
- ②駒大演芸広場
- ③スペシャル対談
- ④ホームカミングデー特別授業
- ⑤サークルフェスティバル
- ⑥映像で振り返る駒澤大学
- ⑦同窓会全国支部広場
- ⑧オンライン交流会
- ⑨全日本大学駅伝大応援会



[画像]開催案内ちらし

5 リアルタイム企画の必要性

前述のとおり「第18回ホームカミングデー」のほとんど

が、事前収録のオンデマンドコンテンツ視聴型のプログラムであった。日程・時間を指定して企画は実施するもの、ご参加いただく同窓生の皆さまと時間軸における共有・共感が得られないのではという懸念から、同じ時を共有できるコンテンツの必要性が浮上した。他大学の事例ではオンライン(参加型配信)で「大学にまつわるクイズ大会」を実施したり、LIVEでの「講演会」や「表彰式」などを行ったりするケースを目にした。われわれが考案した企画案は、ほとんどが作り込みを優先するためにも事前収録が望ましかった。一方でLIVEである必要性が乏しい。オンラインで実施するコンテンツに「オンライン交流会」があったが、これはあくまで申し込み制で参加された方同士のみが交流するプログラムのため、LIVE感を演出する内容ではない。そこで、われわれはホームカミングデーの開催日程に着目した。

6 駒澤が一つになるコンテンツ

「第18回ホームカミングデー」の開催日は2021年11月6日(土)・7日(日)であったが、2日目の7日には本学の関

係者や同窓生、駒大ファンにとって秋のビッグイベントである「全日本大学駅伝対校選手権大会（以下、全日本大学駅伝）」が控えていた。日程がホームカミングデーと重なったわけである。この一大イベントとコラボレートしない手はないと考えだしたが、「全日本大学駅伝大応援会」であった。

駒澤大学同窓会には派遣講師という制度がある。著名な同窓生を同窓会地域各支部などからの要請に応じて派遣し、派遣講師は講演や落語などの演芸、演奏などを披露して場に花を添える。この派遣講師の中に「ものまねアスリート芸人」として活躍し、本学陸上競技部の出身でもあるM高史氏がいた。彼ならば駒大のマニアックな知識はもちろん、陸上競技のWeb記者としての経験からさまざまな情報を有しており、キャスティングには最適だった。では彼をもってして何をするか……。打ち合わせの末に出た結論が「YouTube LIVEによる駒大独自の全日本大学駅伝実況中継配信」であった。

2021年の駅伝は新型コロナウイルス感染症の影響で現地応援が禁じられていた。ならば同窓生やファンの皆さまはテレビ中継で応援する。その観戦のお供に、パソコンやスマートフォンを通して駒大のオリジナル実況解説が聴け

るという企画である。さらに企画を盛り上げるためにさまざまな団体に所属する現役の学生にもゲストとして登場してもらおうこととなった。まずは本学の学生スポーツ新聞「駒大スポーツ（コマスポ）」を手掛けるメンバーである。彼らにはM高史氏との掛け合いと日頃の陸上競技部取材で得た知識を披露し、中継に厚みを増してもらおうことを期待した。次に、本来であれば現地で出場選手たちに全力のエールを送るはずだった「応援指導部ブルーペガサス」チアリーダー部のメンバーである。彼女たちには現地に行けず悔しい思いをした同部のメンバーの分まで、実況を通してエールを届けてもらうべく参加してもらった。以上、メインMCにM高史氏、ゲストにコマスポ編集部、応援指導部ブルーペガサスを迎え、企画は行われることになった。



[写真1] 全日本大学駅伝大応援会配信メンバー

7 「第18回ホームカミングデー」開幕

2021年11月6日(土)、本学にとって初めての試みとなったオンラインによる「第18回ホームカミングデー」が開会を迎えた。14時、同窓会派遣講師で津軽三味線ユニットの「輝&輝」による軽快な三味線の音色が開幕を告げると、駒澤大学・各務洋子学長、駒澤大学同窓会・大石孝会長によるあいさつがなされ、その後、本学卒業生でフリーアナウンサーの高田英子氏による司会進行の下、順次各コンテンツを配信した。「駒大演芸広場」では、同窓会派遣講師の落語家・桂竹丸氏による落語と、江戸太神楽師の花仙氏による名人芸を配信。「特別授業」では、仏教学部・村松哲文教授による「仏教美術の楽しみ方」をテーマとした講義を、本学の施設である禅文化歴史博物館を舞台にお届け。事前収録の各種コンテンツは順調に配信された。

8 全日本大学駅伝大応援会

2日目、いよいよ全日本大学駅伝当日。配信用スタジオは準備万端。全日本大学駅伝は距離が8区間106.8km

と長く、スタート時間も朝8時と早いため、出演者や配信クルー、事務局も早朝からスタンバイした。そして、テレビ放映開始に合わせて「全日本大学駅伝大応援会」LIVE配信がスタートした。

「現状打破！」実況・解説のM高史氏お決まりの一言から開会。レースに注目しながらも、ゲストのコマスポ編集部メンバーとの掛け合いが軽快である。M高史氏は自身もランナーで、陸上関連の取材を数多くこなしているだけあって知識量がすごい。走り方、シューズの特徴、

ランナーの心情など、多種多様なコメントや解説は期待以上のもの。称賛と感心の声がYouTubeのチャット画面にも表れる。続いては応援指導部のチャイロダーを迎え、メールとともに実況をお届け。レースの展開も上々で



[写真2] LIVE 配信スタジオの様子

1区走者は見事、区間賞を記録。トップで襷たすきをつないだ。

目まぐるしく展開するレースと同じく、M高史氏の解説もとどまることなく続いていく。陸上競技部卒業生だからこそ知る最新の駒大選手情報を織り交ぜながら、それでいてテレビ中継から流れるタイム差なども漏らさずに配信に乗せていく、見事なさばきぶりであった。彼がいてこそ、本学ならではのオンライン企画を届けることができた。肝心のレースはさらに盛り上がる展開となり、最後は見事トップでフィニッシュ。

LIVE配信ブースも最高潮の盛り上がりと歓喜の中、「全日本大学駅伝大応援会」は大成功で幕を閉じた。視聴回数は、配信時間内に1万1千回を超え、駒大ファン、駅伝ファンの熱狂ぶりをあらためて感じる結果となった。



[写真3]ゴールに沸く出演者たち

9 襷たすきがつないだ母校愛

新型コロナウイルス感染症の影響は、ホームカミングデーのみならず全国各地の支部同窓会開催の機会をも奪い、母校に集う機会を逸してしまった。そのような環境下で、初挑戦となった「オンライン」企画。本学には絆を一つに結ぶものがあつた。オンラインだからこそ、全国どこでも、海外からでもつながることができた。同じ配信を観て、聴いて、母校の背中を押し、最後に同じ感動を分かち合うことができた。お互いの顔は見えないが、間違いなく気持ちの一つにつながった時間だった。

「駒澤大学」といえば「スポーツ」という印象は今でも多く聞かれる。勝ち負けがあり、応援する人がいるという概念が成立している「スポーツ」があつたからこそ、一つのコンテンツを生み出すことができた。あの日あの時の感動と一体感を忘れることなく、これからも母校がつながる瞬間を演出していきたいと思う。

多様な交流ができる同窓会
組織であるために。「楽しい」
演出とエネルギーの創出を。

—TACHIBANA

THANKSDAYに込めた想い—

蘆田 一毅

京都橘大学総務部総務課長

石原 雅子

京都橘大学企画部広報課長

1 京都橘大学淳芳会について

京都橘大学 淳芳会じゅんぽうかいは、全卒業生が加入する同窓会組織であり、1期生が卒業した1971年に設立。現在の会員数は2万4千名を超える。会員相互の親睦をはかり、また京都橘大学の教育・研究活動を支援することを目的としている。

淳芳会では、毎年秋に開催するホームカミングデーをは

じめ、さまざまな企画を運営している。また、在学時代から淳芳会への参画意識を高められるように、年に1度の総会・懇親会は現役学生にも開放している。その他、機関誌の定期発行など、母校の成長に期待し、応援してもらえるよう広報活動を行っている。

一方で、本学は女子大学からスタートしたこともあり、淳芳会企画への参加者は40代以上の女性が大半である。そのため、実施するイベントや企画内容も子育て世代を対象とした傾向が強い。今後さらに、卒業生ネットワークの礎を強固にしていくためには、①共学化（2005年度）以降の男性卒業生の参加率をあげること、②新たな参加層の開拓、③20〜30代と40代以上の相互交流を生み出していくことなどが必要である。

2 コロナ禍で分断されたつながり

本学は、さまざまな分野を学ぶ学生たちがひとつのキャンパスに集い、日常的に交流することで多様な価値観や考え方にふれて人間として成長していくことを重視している。大学生活を振り返ったときに、多くの友人たちと

共に学び、切磋琢磨して取り組んできたキャンパスでの思い出があるからこそ、卒業後も大学とつながっていたいと思えることもあるだろう。

また、教育・研究の推進と共に、地域コミュニティの活性化も大学の果たすべき重要な役割と捉えている。2022年に学園創立120周年を迎えた本学は、常に地域社会に支えられて、これまでの歴史を歩むことができた。学生が学び成長していく環境は、大学の中だけではなく、地域や自治体の支援があつてこそ充実したものとなる。

しかしながら、新型コロナウイルス感染症の発生により、当たり前にあつた学生生活や地域イベントは、「人との接触を避ける」ということから、あらゆる交流の機会を失つてしまった。本学はどんなときも「教育をとめない」を合言葉に感染防止対策と教育環境の継続に注力してきたが、地域交流という側面からは否応なく自粛を判断せざるを得なかった。

この2年間、ワクチンの職域接種をはじめ、大学として感染対策を様々に講じてきた。まだまだ収束には遠い状況でもあり様々な意見や葛藤はあつたが、「新しい日常を創りだしていこう」と呼び掛けてきた本学として、コロナ禍により失われてしまったコミュニティにおけるつながり

や絆、地域の賑わいを取り戻すことをめざし、2022年10月、「TACHIBANA THANKS-DAY」をキャンパスで開催するにとつじた。

3 世代や立場を超えた交流の場 「TACHIBANA THANKS-DAY」開催 —「ただ楽しむ」ことに込めた想い—

「TACHIBANA THANKS-DAY」は学生、卒業生、教職員の帰属意識を醸成するとともに地域の方への感謝を伝えていく機会としても位置付けた。京都橘に集う多くの人に新しく変化し続ける本学の「今」を感じてもらいながら、共に未来を創っていこうという意思を込めている。

当日は、著名人を招いてのスペシャルライブやトークショー、スポーツイベント、フードフェスといった誰もが参加しやすく楽しめる企画を展開した。また、中学・高校・大学が一体となった「ホームカミングデー」を実施。私立総合学園として、成長、発展してきた背景には、卒業生の活躍や支えがあつたからこそであり、今後も挑戦し続ける母校に期待と誇りを感じてほしいという思いから同時に開催した。

「TACHIBANA THANKS-DAY」は、もう一つと

ても重要な企画を準備した。コロナ禍で2020年度に実施することができなかった入学式だ。「自分と他者の命を守るため、感染者をださないように今はみんなで我慢しよう」という大学からのメッセージに、当時、学生たちは戸惑いながらも受け入れる選択しかできなかっただろう。

本来であれば、大学は、教育や研究活動の場であるとともに、様々な友人と出会い、共に学び、意見を交わし合い、心を動かす経験や、時には衝突も繰り返しながら他者を思いやる心を育み、人間としての成長を遂げる場であるはずである。学生同士で喜び、称え合い、困難な状況も仲間と乗り越えていく経験、他者の意見を受容し、多様な価値観にふれ、新しい世界に入っていく経験があるからこそ、社会にでてから自分軸で物事を判断し、新しい未来を切り拓いていこうとする力になるのだろう。

コロナ禍を、一緒に乗り越えようとしてきた学生たちに對して、大学として、どんなエールを送ることができるだろうか。そんな想いから、企画した「3年目の入学式」。ここでは、世代や立場を超えて「ただ楽しむ」というシンプルなキーワードをもって開催した。

4 異色のコラボによりエネルギー溢れる 圧巻のパフォーマンス

「TACHIBANA THANKS-DAY」のスペシャルライブでは、高校と大学の部活動によるコラボパフォーマンスがメイン企画とした。高校卒業生のバンドや地域の小学生が参加したステージなど普段はみることができない異色のコラボレーションにより、会場を盛り上げた。また、コロナ禍で思い通りにならない日々を過ごした自分たちだからこそ、社会に伝えられることがあるはず、という学生たちの思いから生まれた学園応援ソング制作プロジェクト。シンガーソングライターの河口恭吾さんと共に創った楽曲「STORIES 2022」を吹奏楽部の演奏と共に披露した。その他、卒業生と共に学び続けることの面白さについて語り合ったトークショー、3×3スポーツイベントなど多彩な企画を運営し、約1000名の来場者があった。

本学として初の試みではあったが、大学という知の共同体の中で、多様な人同士が他者を思いやりながらつながりあい、未来に希望をもって、夢や目標に挑戦し続けられる環境を整えていくのだというメッセージと共に、それぞれ

れが一步踏み出す一助になっていればと願っている。

5 帰ってきたくなる、集いたくなる 「京都橘」であるために

「ホームカミングデー」を核に現役学生、地域の方も引き込んだ「TACHIBANA THANKS-DAY」。本学における同窓会組織の活性化という観点からは、卒業生と在学生が日常的につながりあえる交流の機会の創出が課題の一つとして顕在化した。また、今後、同窓会企画に新たな層の参加を促していく点からは、男性卒業生や20、30代の卒業生が日常とは異なる空間で新鮮な気づきや楽しさを実感できる事業を継続して展開していくことが必要である。帰属意識や愛校心の醸成といった抽象的なものに留まるのではなく、①卒業生にとって価値あるネットワークであること、②在学時代から交流の機会を提供し、主体的に参画する仕掛けをつくることに、特に注力していきたい。

このためには、同窓会組織への参画意識のハードルを下げるのが大切である。堅苦しい内容ではなく、学生、卒

業生、教職員、地域の方々が出会い、混ざり合いながら、京都橘というプラットフォームの中で新しい交流の芽が生まれる環境を整えていく。

また、大学は在学期間中だけのものではなく、卒業後のその人の人生を支える存在でありたいと思う。人生100年時代といわれる現代だからこそ、さまざまなライフステージに必要な学び、知識、技術の習得を求められることがあるだろう。本学は、2023年4月より一般社会人、学生、卒業生を対象にした「たちばな教養学校UKON」を開講する。ここでは、自然や生命のなりたち、社会のあり方、私たちの生き方を問いながら、年齢や立場の異なる人と語り合える場を提供していく。

活発なネットワークを構築していくためには、卒業後からのアクションでは困難である。在学時代の想い出の中に、友人や地域の方と共に卒業生と交流した経験を積み上げ、存在意義を強化していきたい。

多様な人が集い、喜び楽しみながら、未来への期待をわかちあえるような対話を通して、京都橘がいつでも「心のふるさと」であるように、卒業生との新しいコミュニケーションの形を試行錯誤、生み出していきたいと思う。

卒業生との関係強化の 起爆剤としての事例紹介

上坂 孝博

学校法人桜美林学園事業開発部長

はじめに

大学を取り巻く環境が厳しさを増すなかで、卒業生との関係強化の重要性は言うまでもない。卒業生は、学生、受験生およびその保護者、地域、産業界など、さまざまなステークホルダーの特性を併せ持ち、大学にとって特に重要な、財産ともいえるべき位置付けである。母校愛を持てば、地域や職場でその魅力を語り、わが子に受験を勧め、機会があれば自分も再び母校で学ぼうと考える。母校に対し、地域や産業界の情報を提供することもある。しかしながら、多くの卒業生が母校愛を持ち、母校支援に意欲的とは

限らない。大学からの一般的な卒業生サービスの施策として、大学広報誌の発送やWebサイトを通じた大学情報の提供、大学施設の利用便宜、ホームカミングデーの招待等があるが、卒業生サービスといっても目新しい取り組みではないため、興味・関心を示すのは一部の卒業生に限定され、母校愛の薄い卒業生には響いていないのが実情である。

大学が卒業生と持続的関係を構築していく一つの方途として、他大学では既に先行して取り組まれているが、卒業生組織の構築、ホームカミングデー、新たな寄付金等、大学と卒業生がつながる意義やそこから見込まれる効果、今後の展望を見据え、新たな取り組みを開始した。

1 校友会組織の充実

桜美林大学の卒業生、在学生、教職員、関係者と母校をつなぎ、誰もが安心して参加できるネットワークの構築と卒業生（校友）の益々の活躍・母校の発展 充実を目指し、2018年に桜美林大学校友会を発足した。発足当時は、申し込み者だけが校友会会員となったが、2023年3月以降卒業生は、卒業と同時に10年間の校友会会員となるよう制度を整え、これ

に合わせて2022年4月、校友会を一般社団法人化した。

校友会会員には校友会公式LINEアカウントでのデジタル会員証を提示することによる割引サービス等さまざまな特典を設け、現在9社からの特典を提供いただいているが、今後はさらに福利厚生サービスを導入することも検討している。2022年7月から校友会会員の交流の場、学園のシンボルとして「桜美林学園東京倶楽部」がオープンした。所在地はビジネス・商業が息づき、「歴史と文化の中心」でもある東京都新宿区の四ツ谷駅徒歩3分のコモレ四谷内教育棟グローバルスタディスクエア3階である。

オープン後は一都三県の卒業生、あるいは地方からの卒業生の憩いの場となり、新たなコミュニティ形成の場となることに期待している。

また、コロナ禍以前のような大々的なイベントを行うことが難しくなってきたことから、「月イチホームカミ」という毎月1回の小規模ではありながら、卒業生同士の交流



[写真1] 桜美林学園東京倶楽部

や卒業生と在学生との交流を狙いとしたイベントを開催している。これまでに、以下のようなイベントを実施している。

- 卒業生ヨガインストラクターを活用したヨガレッスン
 - 卒業生落語家と落語研究部との合同寄席
 - 業界研究セミナー
 - プロの写真家から写真の技術を学ぶワークショップ
 - ビジネスマッチを目的としたビジネス交流会
 - 桜美林出身者の声優を2人お招きし、トークイベント
- 毎回多くの反響をいただいているが、多い時では70人程度の参加者が集まる。

(参考) : <https://obirin-hcdstudio.site/2#pastevents>

2 ホームカミングデー

本学ではホームカミングデーを2010年から実施している。当初は大学祭と同日開催とし、卒業生の基調講演×懇親会というスタイルでスタートしたが、2019年から校友会と担当部署である校友課が主体となり、卒業生を活用したさまざまなワークショップ、セミナーを同時開催する等、新たな取り組みを開始した。

特に学生への「ホームカミングデー」の認知を高め、卒業後に自身が参加する「自分ごと」としてのイメージを持つてもらおうよう、在学時からアルバイトとして積極的に関与する機会を提供している。SNSも積極的に活用し、一時期は毎日投稿することでフォロワー数を増やす施策を行いホームカミングデーへ向けた発信力の強化を図った。また、卒業生のトーク、卒業生同士や学生との対談、学長、卒業生、学生とのパネルトークなど、グローバルに活躍している卒業生にさらなるフォーカスをあて、学内関係者が自分ごととして見る事ができるコンテンツ作りを心掛けた。

2020年、2021年はコロナ禍のため、オンライン開催とした。桜美林大学のYouTubeチャンネルからさまざまなコンテンツが配信され、どなたでも楽しめるイベントになっている。リポーターには学生を登用し、オンラインであっても卒業生が応援したくなるアットホームな雰囲気作りを努めた。

3 「100年桜まつり」 「リ・ユニオン & ホームカミングデー」開催

2021年に創立100周年を迎えた桜美林学園は、コ

ロナ禍によって延期となっていた記念式典を2022年の5月に実施し、11月12日に大学・中学・高校・幼稚園の卒業生が一堂に会する「全てのオベリンナー来校の日」として、さらには在学生、父兄、近隣住民も巻き込む大きなイベントとして「100年桜まつり」を開催した。コロナ禍後初の対面イベントで、複数の会場からの配信も行うハイブリッド型で実施し、当日は約2000人が来場した。

学生生徒の演技披露や、設置校長らによるパネルトークといった企画の他、クラスや学部・学群、業種、年代、部活、ゼミなど、コミュニティ別に集まれる場も用意した。さらに、卒業生・在学生、教職員、学園関係者で作り上げた、創業者清水安三の生涯を描いたオリジナル合唱劇「合唱物語 石ころの生涯」の上演。単に大学からの情報発信や卒業生との関係強化だけでなく、卒業生、在学生、教職員、さらには地域の皆様とともに、次の100年に向け新たな出会いと交流の場となる



[写真2] 100年桜まつり

ような企画を実施し、多くの方に楽しんでいただいた。

4 桜美林独自の募金「ふるさと桜募金」

自治体のふるさと納税をヒントにした、寄付者が返礼品を選ぶことができる寄付システムで、返礼品は卒業生の手掛けるものやキャンパスが所在する地域の特産品など、学園にゆかりのあるものを揃えている。

卒業生の手掛けた返礼品をきっかけとした卒業生間のコミュニケーションづくりだけでなく、地域への貢献、そして新しいコミュニティ形成への可能性を秘めている。実際に寄付をしていただいた皆様からの声として「愛校心が強まる」、「寄付したことが記念に残る」、「学園や卒業生とのつなが



[図1] ふるさと桜募金

りを実感できる」との声が寄せられている。

この取り組みは単なる寄付ではなく、卒業生とのコミュニティ形成のためのミッションと考えており、今後さらに返礼品数も増やし、この取り組みを拡充したいと考えている。

(<https://kifu.obirin.jp/howto/gift>)

おわりに

本学園は100周年を迎えるにあたり、「桜美林学園の独自性を強め、尖らせていく」という意味を込めた新長期ビジョン「Unique & Sharp」を策定した。策定には多様なステークホルダーの声も反映している。卒業生重視の背景には、多様なステークホルダーとのコミュニケーションに対する大学の意識の高まりがある。

今回ご紹介した取り組みを継続すると共に、新たな取り組みを通じ、卒業後も卒業生と大学との関係が継続すれば、その家族、地域や産業界など、多様なステークホルダーとのさまざまなつながりを通して「大学ファミリー」を拡大し続けることができる。すなわち、卒業生の共感と協力こそが、大学の永続的な発展を支えたと考えている。

ホームカミングがもたらす

豊かな時間とは

―母校はなにゆえ「マザー」であるのか―

中里 則之

立教大学総長室次長兼渉外課長

はじめに

立教大学校友会ホームカミングデー（以下、ホームカミングデー）は、2022年の開催で60回を迎えることとなった。10月16日に迎えた当日、「3年ぶりの対面開催」「母校の55年ぶりの箱根駅伝出場（前日に決定）」などの状況も重なり、前回（2019年）の約2倍近い1万5千もの入場者を得た。本学池袋キャンパスの想定するキャパシティを大きく超え、各催し物、売店は大いににぎわい、午後には売り物がなくなる店が続出するなど、「これまで経験したことがない」大盛況の1日となった。



[写真1] 正門入り口

ホームカミングデーは校友による校友のためのお祭り。母校を懐かしむ来場者の顔は一樣に笑顔で、他の学内イベントにはないアルコール類の提供などもあり、「お祭り」としてのキャンパスの賑わいを楽しむ1日となった。

1 立教大学のホームカミングデー

さて、本学校友会のホームカミングデーだが、基本的には企画・運営すべて現在は校友会が担っている。形としては「大学・校友会共催」として運営予算の一部を大学も負担しているが、直接的に大学が運営に携わることはない。大学は施設を提供し、施設利用に際してのサポート、清掃などを行う関わり方になっている。

校友会の組織のうち「専門委員会」という7つの委員会を中心に実行委員会が立ち上がり、企画と当日の運営全般を担う。委員は校友がボランティア

で着任し、当日は委員会ごとに役割分担が振られることになる。総務委員会は受付、財務委員会は子供縁日、組織委員会は大福引大会など、委員会単位での仕事として休日返上で参加していただいている。

全体的なプログラムとしては、ミッションスクールらしく朝の礼拝から始まり、オープンマーケット「図1」、子供向けアトラクション、著名校友の講演会、大福引大会へとつなが

OPEN MARKET

オープンマーケット

| 時間 | 10:00~16:00
| 場所 | 4丁目~8号館前付近

青空の下、お買い物をお楽しみいただけます。

団体名	出店概要	団体名	出店概要
1 ホニー乗馬体験受付		16 不動産立教58会	豚汁・がんもち等
2 樋口真理	吹きガラス食器、ウールのマフラー等	17 三木部	おでん、日本酒
3 ハッピーママ	手芸品、服、バッグ等	18 常の縁	立教関係者が製造するアルコール類
4 ルート	オリジナルトートバッグ制作	19 熊谷立教会	日本酒、梅酒、酒粕、五常宝、雑貨、甘酒等
5 社会保険労務士セントゴール会	社会保険労務士による 社会保険・労務問題等の相談コーナー	20 練馬立教会	ワイン、パン、書籍
6 行政書士立教会	無料法律相談会	21 立教セカンドステージ大学 ユネスコクラブ	本、タオル、食器等
7 皇島立教会のカミオのテント	ネックレス、ピアス、ストラップ等(値札の半額で販売)	22 キャンパスツアー受付	
8 立教大学交響楽団	定期演奏会チケット	23-24 本部	
9 立教学院会連帯	立教カレンダー、立教グッズ等	25-28 校友会レディスクラブ	コーヒー、紅茶、焼き菓子、手芸小物、 校友会レディスクラブ広報
10 さかなげ立教会	カフェラテ、コーヒー、紅茶、クッキー、パウンドケーキ	29 ビジネスデザイン立教会	オムライス、ソーセージ、手作りフルーツ ドリンク、コーヒー、各種デザート
11 セントポールライオンズクラブ	お花、化粧品、雑貨	30 体育会アメリカンフットボール部	アメフトグッズ
12 横浜立教会	生ビール、焼きおにぎり	31 体育会女子ラクロス部	オリジナルグッズ
13 公益財団法人キープ協会 清泉寮	清泉寮についてのパネル展示、 クッキー、ミルクジャム、牛乳せんべい等	32 体育会ラグビー部	ラグビーグッズ
14 わいちゃんのおぼろ餅	おむすび、ソフトドリンク	34-38 縁日	
15 湘南立教会	湘南の特産品		

● 体育会グッズ販売
体育会グッズを買って、頑張る学生たちを応援!

アメリカンフットボール部

女子ラクロス部

ラグビー部

● ルート
自分だけのオリジナルバッグが作れます!

[図1] ホームカミングデーのオープンマーケットの案内

る。大学としては狭い敷地を全面に使ったオープンマーケットは今年度合計28店舗。それ以外にもキッチンカーが10台入り、華やかで賑やかなホームカミングデーとなった。

また、日程面で2002年にそれまで開催日を固定していた11月3日文化の日から10月中の日曜日に移して、学生の学園祭との競合を避け、キャンパスを全面使用することで来場者を飛躍的に増加させることができるようになった。

このことは、キャパシティの大きいホールの使用や模擬店の出店数の増加のみならず、大学に帰ってきた校友の「居場所」を学内各所に提供することを可能とした。ようやく「ホームカミング」の本来的な役割を果たせるようになってから20年、千人に満たなかった来場者は今や1万人を超える一大イベントに拡大することができた。現在は、校友のみならず、立教学院各校、地域住民への案内も含めて「ホームカミング」の対象を広げて、シンボリックなキャンパスでの1日を楽しんでもらっている。

2 大学と校友会のホームカミングデー

前述のとおり、本学のホームカミングデーは大学と校



[写真2] 立教サイエンススクール(理学部化学科)

友会の共催であるが、大学は基本的には企画・運営に携わることはない。別の言い方をすると、このイベントに対して何らかの戦略的意図をもって臨んでいるという状況ではない。

もちろん、このイベントが多く、校友が運営に自主的に携わる場として「イベントとしての役割分担」が極めて上手くいつているとも言える。大学の方は新入職員を業務上の「動員」として派遣し、手伝いに加わることで校友の存在や息遣いを感じる貴重な場になっている。

ステークホルダーとしての校友会は、常に法人、大学との間でも密な関係を築いており、トップ間の情報交換も盛んである。校友会の各種行事への大学幹部の参加、そこでの大学の近況報告なども毎度きちんと行われている。そういう関係性の中で、大学にとってホームカミングデーは「校友に純粋に大学での1日を楽しんでもらう」ということで、例えばそこでの募金要請活動なども最小限にとどめてきた。このことは消極的なアプローチではなく、「立教らしい奥ゆかしさ」を体現したものであると感じている。

一方で近年、本イベントの状況に注目した学部・大学

院からの参加希望が出るようになってきた。今年度は理学部化学科(立教サイエンススクール)、大学院人工知能科学研究科、立教セカンドステージ大学が教室を使つてのイベントを開催し、多くの参加者で賑わった。今後はこのような形でホームカミングデーを活かしていただき、卒業生へのアピールの場として利用していくと、「共催」の意味がさらに深まっていくことになると考えている。

3 ホームカミングデーの新たな展開 バーチャル同窓会などの運営

新型コロナウイルス感染症の拡大によってもたらされた大きな変革のひとつが「オンラインによるコンテンツの配信の一般化」であろう。2020年度、2021年度のホームカミングデーは全面オンライン配信の形で実施し、ドローンを使った母校からの生中継や著名校友をキャストイングしながら最大限のコンテンツを盛り込んだ。その結果、1万人以上の視聴があったという数的成果だけでなく、これまでホームカミングデーに来られなかった海外をはじめとする遠方在住の校友からの反応があったことは主催者として

得た大きな成果であった。このことはあらためて「ホームカミング」の意味を問い直すきっかけになった。

また、大学時報406号(2022年9月発行)でも特集で取り上げられたVR(バーチャリアリティ)の世界について、本年のホームカミングデーでも試験的に「バーチャル同窓会」をメタバースの世界で実現させるという試みがなされた。仮想空間上に本学キャンパスのシンボリックな建造物や学生食堂などを設置して、そこに「みんなが集まろう！」という仕掛けにした。同窓会自体の参加者はあまり多くなかったが、当日設けられた体験ブースには次世代を担う子供たちを中心に多くの来場があり、改めてその関心度の高さを思い知ることになった。

仮想空間上の集まりでも「同窓会」には変わりはなく、アバターであっても「昔懐かしいあの人？」なのであろうか。そのあたりの解釈については、今後この仕組みの普及と一般化の状況を見て考えていくことになろうが、どういう形であれ「集まる」ことを優先に考えていくことに変わりはない。

そして、オンライン授業が一般化した今、キャンパスそのものの存在も価値観も変わっていくことになるのだろうか。そのあたりの価値判断は次世代に引き継がれることになる



[写真3]バーチャル同窓会

が、仮想世界の出現に校友会活動の変革の息吹を感じざるを得ない。

おわりに

本学池袋キャンパスの正門を入ると、正面にレンガ造りの時計台のある校舎、左右対になったチャペルと旧図書館が目に見え、同じく左右対になったヒマラヤスギの間を通り、時計台の下を抜けると手入れされた芝生とその奥に第一食堂が。立教の卒業生なら誰でも目に浮かぶその風景。大学はこのレンガ建物群を「メモリアルゾーン」として永久に残すことをキャンパスメイキングの中に常に位置付けてきた。このこと自体が大学にとっての大きな矜持であり、卒業生に向けての何よりのメッセージであると思っている。

ホームカミングデーはそういった卒業生が母校を訪ねるきっかけ作りに役立っている。参加者からは「ホームカミングデーが久しぶりに大学でやるから、友達誘って行ってみようか」「行けば誰かいるかも…」という声が。これだけで、このイベントは目的を達成したようなものである。講演会も

模擬店も単なるお飾りで、大事なものはもつと別の世界にあるわけだ。

キャンパスを歩く参加者の顔は日常生活とは違った笑顔に溢れている。そんな時間と空間を提供すること、それが「また来てみようか」「みんなが集まりたいね」「うちの子も立教に入りたい!!!」という声につながっていくことを願うばかりだ。

キャンパスは基本的にはいつでも開放され、卒業生でなくてもその門をくぐることができる。だが、そこにいた人間がこの門に入ってそこにある空気を吸い込んだ時、長い人生の中でたった4年という時間、されど青春時代のかけがえない4年間がよみがえる。時にはその宝の箱を開けてもらえるよう、母校(マザー)は連綿とレンガの校舎を守り続けるわけなのだ。

そんなお祭りのような1日があってもいいはずだ。